

トーク 企画

市長としゃべらんで 地域おこし協力隊 × 原井 敬 市長



「市長としゃべらんで」第15回目の今回は、新たに着任した「地域おこし協力隊」の6人の内、3人の隊員と原井市長とのトークセッションの様をお伝えします。(収録日：10月4日)

※次回の「市長としゃべらんで」では、残りの3人の隊員とのトークセッションをお伝えします。(予定)

地域おこし協力隊に なろうと思った理由

市長 それでは、簡単な自己紹介と地域おこし協力隊を志望した動機を須藤さんからお願ひします。

須藤 須藤優と申します。京都府京都市出身です。志望した理由は、私は小さい時からテレビで田舎の農業番組などを見ていて実際に農業をやってみたいという思いがありました。前職を辞めたタイミングで、自分のやりたいことをやろうと思い、農業関連の仕事を調べていました。そんな時、知り合いの人から地域おこし協力隊という制度があるという話を聞き、調べていたら吉野川市が農業の部門で募集しているのを知りました。僕も農業の知識を習得したかったので応募しました。

市長 ありがとうございます。確か実家は全く農業に関係なかったですよね。

須藤 はい。

市長 土いじったり野菜を育てたりは？

須藤 家の庭でプランターを使って。

市長 家庭菜園？

須藤 家庭菜園で大根を育てたりしてました。

市長 なるほど。まったくの素人っていうわけでもないんですね。

須藤 でも、知識とかは全然ないので。

市長 今は農協のどこにおるのかな？

須藤 今は上浦の育苗センターのハウスでプロットコーの苗を育てています。

市長 普段はずっと上浦の方でおるん？

須藤 はい。

市長 なるほど。基本的には体を動かす業務と思うんですが座学みたいなのはあるの？

須藤 基本は体を動かす業務です。

市長 体で覚えるみたいだね。

須藤 はい。

市長 それでは、次に和泉さんお願いします。

和泉 5月から市長公室の方でお世話になっていますが、和泉美佳と申します。私はこの3月まで東京の区役所で勤務していたのですが、今後の自分のあり方を考えるうちに、今とは違う環境で新しいことにチャレンジしていきたいという気持ちで年々強くなり、リスタートという意味でも思い切って地元に戻ることを決めました。そんな時に地域おこし協力隊の募集があることを知り、業務内容が自分のやりたいことと合致したので、応募しました。

市長 ありがとうございます。和泉さんの場合は、この3人の中で唯一、吉野川市生まれですね。

和泉 そうですね。

市長 美郷生まれ、美郷育ちですね。

和泉 はい。

市長 藤田さんは美郷のことは知ってる？

藤田 アワガミ国際ミニプリント展の審査会の時に初めて行きました。

市長 美郷のふるさとセンターでありましたね。須藤さんは吉野川市内あちこち行った？

須藤 まだ、ちょこっとだけです。

市長 美郷は色々四季折々のイベント





原井 敬 市長



す どう ひろ
須藤 優 氏

農業振興に関する業務
麻植郡農業協同組合勤務



ふじ た
藤田 ひかる 氏

阿波和紙の伝統技術の継承に
関する業務
阿波手漉和紙商工業組合勤務



いずみ み か
和泉 美佳 氏

吉野川市のPR および広報活
動に関する業務
吉野川市 市長公室勤務

トがあつて、人口はかなり減つて多分700人台（10月末現在774人）だったと思います。昔は小学校が4つあったんです。私が生まれる前で50年前までは人口が3000人ぐらい（昭和45年の人口3302人）いたんですよ。現在、小学校は全部廃校になってしまったんですけどね。自然が豊かで梅酒も含めて色々なコンテンツがあつて、美郷は交流人口がすごいんですよ。また、和泉さんには色々と発信していただきたいと思っています。

和泉 はい。

市長 最後に藤田さんお願いします。

藤田 藤田ひかると申します。現在は和紙会館で業務をさせていただいています。出身が大阪で、大学が京都で4年間京都に住んでいました。大学が美術系の大学で、その時に紙漉きをやっていました。卒業制作でも和紙を使っていて、和紙に関わる就職がしたいなと思い、就職先を探していた時に和紙会館にたどり着きました。そこで地域おこし協力隊という働き方を知って、面白そうだな、働いてみたいなと思い、志望したのがきっかけです。

市長 面接の時に自分の作品を色々見せてくれたよね？

藤田 あれは和紙で作ったお面です。実際に面接の時にお見せしましたね（笑）

市長 さすが美術系の大学の学生さんだなと感じました。

藤田 今も作品作りは継続してやっていて、10月1日まで和紙会館2階のギャラリースペースでスタッフ展に参加させてい

いただきました。作家活動しているスタッフの方が多くて、10人ぐらい集まって有志でやりました。

市長 スタッフの方は物作りが好きな方が集まっていますからね。

藤田 NHKの方が取材に来てくれたりして、すごく楽しい展示会になりました。

市長 普段は和紙会館の方でおるんですよね？

藤田 はい。現場の方で働いています。

吉野川市の印象は

市長 次に吉野川市に来てみての感想ですね。印象に残ったことをお話いただけたいと思います。

須藤 今一緒に職場で働いている方々は僕に色々なことを丁寧に教えてくださったりと、良くしてもらつていて優しい人たちが多いという印象です。たまに方言が聞き取りにくい時はあるんですけど、みんな優しい方ばかりなので。

市長 なるほど。農家の方と接する時も多々あるよね？

須藤 ブロッコリーの苗を取りにきはる農家さんときゃべつたりすることはあります。

市長 普段教えてくれるのは農協の職員？

須藤 そうですね。

市長 優しい人が多いと。

須藤 はい。

市長 まだ吉野川市内あっちこち行つてないということですけど、自然とか環境とかどうですか？

須藤 京都は最近観光客が多すぎて嫌やなと感じていたので、もともと田舎暮らしに憧れていた僕からすると吉野川市は時間の流れが緩やかでとても住みやすく感じます。

市長 そうですか。京都はインバウンドがすごいですからね。方言は、「しんどい」を「せこい」って言ったり、そういったところかな？

須藤 最初聞いた時はそれを知らなくて。

市長 関西だと、基本的にケチとかそういう意味になりますからね。各地行ったら方言のギャップがありますね。

和泉 和泉さんいかがでしょう。吉野川市に帰ってきてみて。

和泉 そうですね、自分にとって安心できる場所だというのは帰ってきて改めて感じました。美郷もそうですけど、人口が減ってきて寂しくなった部分も昔に比べると少しあるのかなと思ったんですが、自分の行つた小学校が宿泊施設に生まれ変わったりののを見ると、懐かしさもあり嬉しかったです。

市長 田舎の人間関係は親戚の親戚みたいな感じで繋がつてたりしますが、東京はどうでしたか？

和泉 勤めてた区役所自体、人が多くて。

市長 台東区でしたっけ？

和泉 はい。面積は23区で一番小さいんですけど、それでも職員は2000人ぐらいいました。人間関係も横の繋がりもあるんですけど、こっちみたいな密な関係性ではなかったです。

市長 なるほど。

藤田さん吉野川市の印象いかがでしょう。

藤田 やっぱり、大阪京都と住んで、田舎やなと思うことも正直ありますね。エレベーター、エスカレーター全然見かけないとか(笑)

市長 市役所はエレベーターあるけど、確かにエスカレーターはないな。

藤田 大阪とか京都にいた時って田舎に移り住むのってちよつと慣れるけど、排他的(はいどく)というか怖いイメージもあって、よそ者みたいな扱いだったらどうしようとか、地域おこし協力隊としてこちらに来る際も不安だったんです。

市長 溶け込めるかどうかっていうのがね。

藤田 そうですね。実際、来てみたらすごい皆さんウェルカムな雰囲気で、和紙会館っていう特殊な仕事柄のせいか仕事やりたいたから私も来ましたという方が他にも結構いらして、お話を聞いてたら移住者の方と同じ心境だなと思う人も多かったんで、支え合えたりとか。あとは地域の人が一人暮らし大変だろうというので、大量の野菜をくれたり、そういう面でも助けていただいたり心配することなかったなと安心しています。

市長 田舎のお礼っていうのは皆さん野菜とかですからね。

藤田 すごくありがたいです。

市長 同僚には芸術大学出身の子もいますよね。

同じ美術大学とか他の美術大学から来た人も多くて。美術大学じゃなくても、職人(しやくど)をしながら絵を描いてるような人もいたりとか。

市長 お客さんは外国人の方もちよこちよこ増えだしましたね。

藤田 毎日のように見かけますね。今日も中国の方とヨーロッパ系の方を見かけました。見ない日はないですね。

市長 アワガミ国際ミニプリント展ってね、何気にすごいイベントで、外国の方がこぞって応募してくれるんですよね。

藤田 初めて聞くような国もありました。私が大学時代、阿波和紙を知ったのもアワガミ国際ミニプリント展でした。

前年度に大賞を取った方が私の大学で教えてくださった先生で、その時に阿波和紙っていうのを知ったんです。

市長 阿波和紙から募集を知ったということなんですね。

藤田 「こういう働き方あるけど、どう？」みたいなのを提案していただいて、そこで調べてみたのが最初ですね。

市長 社会人1年目ですもんね。

藤田 もう毎日が新しいことの連続で、働くってこんな感じなのかと思ひながら(笑)

これから やってみたいことは

市長 それでは最後に、地域おこし協力隊として活動する中でやりたいことや、任期後の夢などがありましたら、自由にお話いただけたらと思います。

須藤 今は主に育苗センターでブロッコリーの苗を育てて、基本的に水やりしたり、毎日虫がついてないかチェックしたりして、虫がついたらその苗に消毒したりしてます。その他にも休日には、農協の畑の隅(ぐう)っこに僕専用の畝(うね)を立ててもらって、今実際に野菜の種をまいて育てています。

市長 何を育てているんですか。

須藤 今は、九条ネギと大根とほうれん草、今日はジャガイモとニンニクを植えてきました。

市長 なるほど。体で覚えていってる感じやね。その中で今後の展望というのは？

須藤 将来的にはできるだけ農業に関する技術を習得して、まず一人で種から収穫まで自分の力でできるようになることが目標です。

市長 新規就農者には補助金とかもありますからね。育て方も自然栽培から有機栽培など色々な方法がありますよね。基本的に土いじりというか自然と向き合う

のが好きな感じかな。

須藤 そうですね。

市長 今、やりがいを感じていますか？

須藤 はい、楽しいです。畑行く度に、自分が植えた苗の芽が出てたり成長していると嬉しく感じます。

市長 やりがいを感じてやっているんですね。良いことですね。

それでは、和泉さんいきましょうか。

和泉 業務としては、市の公式インスタグラムが6月に開設されたということもあり、インスタグラムの投稿を中心にやらせていただいています。あと、イベントの写真を撮ったり、広報誌の「できごと」の記事を書いたりしながら勉強をさせていただいています。まだ、手探りではあるんですが動画編集にも取り組んでいて、市の公式インスタグラムでイベントの動画を投稿しています。今の目標は、任期中にもっと市の魅力を動画などを通して発信し、フォロワーを増やすことです。

市長 以前は物作りにも興味があるということでしたが、今後の展望はありますか？

和泉 そうですね、物作りに関しては継続してチャレンジしたいと思っています。ですが、今は動画編集が楽しいので、そこに時間を割きたいなと思ってます。将来的には他の仕事をしながら動画編集もやっていくような働き方ができれば良いなと考えてます。

市長 和泉さんは自分のライフスタイルを大切にしながら働いていきたいというイメージがあるのかな。



▲ブロッコリーの育苗作業を行う須藤隊員





▲イベント取材時の撮影を行う和泉隊員

和泉 そうですね。11年間行政という組織の中で働いていたんですが、自分のやりたいことをやらないままでもいいのかなっていうのは自分の中でずっとモヤモヤしていたので、今はチャレンジという意味でも自分の理想に近づくために頑張っていきたいと思っています。

市長 その中で動画に興味を持ったということですね。

和泉 そうですね、今はYouTubeなどで編集の勉強をしています。

市長 わかりました。

それでは、最後に藤田さんお願いします。

藤田 普段は和紙会館の現場で原料の染色で色を染めたり、商品の最後の仕上げをしたりしています。まだ、紙を漉く段階までは職人さんの仕事なので、なかなかそこまでは至ってないんですが、日々色々な仕事を教えていただいています。入社2カ月経った時に東京の出張に突然抜擢されまして、実際に販売するハガキを150

枚ぐらい漉いて、東京に持って行って販売しました。あと、紙漉きの体験ブースで説明をしたり一週間ほど、東京に滞在しました。

市長 良い場所で行ってましたよね。

藤田 青山スクエアでやらせていただきました。事前に先輩方から本をもらって家で読んで準備しました。実際のお客様とのやりとりの中で、気づいたことや現場の営業さんにアドバイスいただいたことをホテルに帰って、明日はこうしようまとめたり、がむしゃらな一週間だったんですけど、それがとても糧になったと思います。

市長 なるほど。

藤田 今後やりたいことなんですけど、ゆくゆくは流し漉き（和紙の基本的な手漉き方法のひとつ）の伝統工芸士になれたら格好いいなという思いはあります。大学時代から画材が廃盤になったり、高騰したりする状況を見てきて、作家になるのは文化を盛り上げる意味でも大事なこ

とだと思のですが、誰かが作る側にいかなければという気持ちもあり、画材や材料が減っている状況を私の作った紙で少しでも支えていければと思っています。またそれが自分の誇りになれば良いなと思っています。

市長 青山の経営理念に「私たちはこの地で日本の伝統文化に関わっていることを誇りに思います」という文章があり、吉野川市で阿波和紙を漉いてるっていうことに誇りを持って、それをどういう風に使われているかなどを発信できたらと漠然ではあるんですけど、考えてます。

市長 そういう使命感をもってくれてるというのは素晴らしいですね。阿波和紙はね、非常に素晴らしいコンテンツだと私も思ってますね。

藤田 インスタも動画とかを載せていまして、結構、海外の方から反応いただけているみたいです。

市長 この間も大きく取り上げられましたね。

藤田 NHKの方で特集していただきました。

市長 阿波和紙が公文書を保存するのに適しているというね。徳島県がウクライナへ阿波和紙を寄贈したというニュースが大きく報じられましたよね。海外からの評価が高いですからね。

藤田 すごくありがたいです。

市長 今でも和紙会館の近隣の小学生は卒業証書自分で漉いてますよね。

藤田 11月あたりにまた来られると思います。

市長 自分で漉いて卒業証書を作るんで

すよね。僕も小学生の時自分で卒業証書を漉きましたね。30年ぐらい前ですけど、ちゃんと記憶に残ってますね。

藤田 皆さんの記憶に残れるというのが、すごい財産だなと思います。

市長 そうですね。

最後に、地域おこし協力隊ってね、都会から来て着任してちょっとイメージと違ったとか、自分はこういうことしたかったけど、来てみたら違ったとか、地元になかなか溶け込めなかったり一定数途中で辞めてしまう人もおるんですよね。せっかく、吉野川市を選んできてくれますから、任期を全うしてもらって、その上で吉野川市で仕事を続けてくれれば一番ありがたいんですけど、皆さんそれぞれの人生なんでね、まずはやりたいことや目標持って追い求めてもらえたらなと思います。本日はありがとうございました。

一同 ありがとうございます。



▲紙漉き体験のワークショップを行う藤田隊員

